



2019年6月17日「奥浅草だより」 第25号

江戸の河川が消えた今

日本堤ポンプ所 吉原大門から土手通りを隅田川方向に歩くと、すぐ日本堤消防署があり、次いで得体の知れない巨大な建物が現れます。東京都下水道局の「日本堤ポンプ所」です。江戸時代に造られた土手は荒川からの洪水を防ぐためでしたが、昭和の始めに取り壊されました。石神井川から分かれた音無川は、三ノ輪で山谷掘が分かれます。山谷掘は明治の終わりまで灌漑用水として使われていましたが、その後は暗渠になっています。日本堤ポンプ所は何をする所かということ、普段はカラの山谷掘が雨水で溢れたとき、洪水にならないよう水位を上げて流すためです。かつて異臭を放っていたドブ川とは思えません。

下水道の今 江戸時代の下水道は雨水排除のためで、し尿は肥料として使い、生活用水はほとんど使い切っていたからです。下水処理に悩むのは現代の特徴ですが、東京はいまや、汚水処理は万全です。1922年から稼働し、1999年に新設された「三河島水再生センター」は、荒川区・台東区などの下水を一手に引き受け、処理後は隅田川に流しています。処理後の下水は、水道水と変わらないくらい透明で、成分を別にすれば水道水と下水は区別が付きません。

水の再生 江戸時代に物資運搬用に発達した河川網は、墨田区ではあちこちにのこり街に潤いを与えているようですが、台東区では暗渠となりあとかたもありません。ところが地下では、洪水を防ぐために大きな役割を果しているのです。他方、三河島水再生センターの上部には「荒川自然公園」という6万平方メートル（東京ドーム1.3個分）の公園があり、新東京百景に選ばれています。また、前身の旧三河島汚水処分場唧筒（ポンプ）場施設は、国の重要文化財として公開されています。

~~~~~  
この奥浅草だよりは『奥浅草 地図から消えた吉原と山谷』の発行後話題を拾って不定期に発行しております。

サノックスのホームページでもご覧いただけます。 <http://www.sanox.co.jp>

佐野陽子・江原晴郎・森下恒子